

北海道・網走の地から

東京農業大学 生物産業学部長

よしだ
吉田

ほづみ
穂積

2020年は、なんといっても新型コロナウイルスに明け暮れた一年であった。私が所属する大学も3月の卒業式の式典中止から始まり、入学式の中止、その後はオンラインによる遠隔授業となり対面での学生との教育・研究活動は秋になるまでほぼ行えない状況となり、我々が十分に理解できていない病原体のために感染状況の変化に右往左往した。この状況は今、網走の畑作物生産の現場で起きている状況と似ているとも感じる。

私が網走到に着任した30年前の所属は、地域の営農集団組織の構成員の一員となっている大学農場であった。地域の生産者の皆さんによる歓迎会で、学生時代の専攻が植物病理学であったという話から、大学出たての私に「先生！そうか病とセンチウをなんとかしてくれよ！」と先制パンチを頂いた記憶は忘れられない。ご存じの通りこの2つはバレイショ生産者にとってはやっかいな病虫害であり、その被害による影響を営農により上手く軽減させていかねばならない。近年では当地でシロシストセンチウの発生も初確認された。我々の大学農場もバレイショの移動制限地区内にあったために、バレイショはもとより圃場管理の観点から他作物の試験研究計画や実施にも制約が生じ、学生への教育・研究の推進

に影響が及んでいる。経営的な被害は少ないものの生産者が持たれる「悩み」や「不安」を僅かであるが自らの肌で感じている。

土壌を介する病虫害は、一度圃場に侵入するとその根絶は難しく、さらに北海道では作付け面積が広いためにその防除コストも安いものでなければならない。このため、生産現場で活用できる有効な防除方法は限られているのが現実である。病虫害の発生は、「1）病原と宿主や寄主が存在しなければならない、2）環境が病原と宿主や寄主の両方に取り適切でなければならない、3）感染・寄生するための十分な時間がなければならない、4）宿主や寄主に関する人間の目的が犯されなければならない」の4条件がそろった場合とされている。今後の病虫害防除に向けては、あらためてこれらの条件を再認識し、病原の拡散を防止すること、「Withコロナ」と同様に病原の合理的なモニタリングを実施し発生要因のリスク管理を行うと共に、「Afterコロナの世界」が求められているようにバレイショの生産・加工・流通そして消費の在り方が新しい様式に転換させていくために、これまで以上に消費者に向けて正しい情報を正確に発信して行くことが大切であろう。2021年がいも類に係わる創造的なアイデアが生まれる年になることを願うものである。